題字　川口市立高等学校書道部　長谷 茉莉奈 さん

終戦から75年。人々の悲惨な記憶は次第に薄れ、戦争を知らない世代がほとんどを占めるようになりました。

先の戦争では、川口からも多くのかたが戦地へ赴き、また、市内でも多くの被害や犠牲が発生しました。

今日の平和な世の中は、こうした先人たちの犠牲により成り立っていることを決して忘れてはなりません。そして、この尊い平和をこれからも守り続け、未来へしっかりと伝えていくことが、今を生きる私たちの責務です。

市では昭和60（1985）年に「川口市平和都市宣言」を行い、戦争の悲惨さと平和な世界を次代に受け継いでいくため、さまざまな取り組みを行っています。

日本デイゼル工業㈱工場被爆

川口高等女学校の薙刀（なぎなた）訓練

舟戸ヶ原での防空演習

善光寺通りの出征風景

太平洋戦争下の川口市の状況

昭和16年（1941）

12月8日　日本軍、ハワイ真珠湾攻撃。米英両国に宣戦布告。

12月9日　市役所吏員、殉国挺身隊結成。

昭和17年（1942）

4月18日　最初の米軍機による空襲で、東京・名古屋・神戸などに被害（ドーリットル空襲）。日本デイゼル工業㈱（弥平町）の倉庫1棟に命中全焼し、他も中小破、死者12人、負傷者88人の被害。

昭和18年（1943）

3月18日～20日　川口市・東京市共催の大型焼夷弾の威力実験と防護訓練を、舟戸ヶ原で開催。

昭和19年（1944）

5月1日　川口高等女学校4年生全員150人、学徒動員令によって日本ピストンリング㈱川口工場（元郷町）に徴用。

昭和20年（1945）

2月19日　米軍、硫黄島に上陸。

3月4日　B29編隊が戸塚村に侵入、爆弾240発以上投下、3人死亡。

3月9日～10日　東京大空襲、東京の下町ほぼ壊滅、全焼23万戸・死者行方不明約10万人。B29の1機、対空砲火に被弾し芝川公園（現オートレース場）に墜落炎上。

3月17日　川口の駅前通りの強制疎開を決定。

4月1日　米軍、沖縄本島に上陸。

4月3日　B29爆撃機の爆弾約25発が並木町に投下され、死者1人、重軽傷者15～16人、全壊46戸、半壊13戸の被害。

4月13日　B29爆撃機の油脂焼夷弾・爆弾の混用投下により、青木町1丁目・寿町・飯塚町1～2丁目・本町1丁目・領家町に被害。全焼82戸、全壊80戸、半焼2戸、半壊50戸。

8月6日　広島に原子爆弾投下、死者推計14万人（12月末まで）。

8月9日　長崎に原子爆弾投下、死者7万3千884人（12月末まで）。

8月10日　市内に大型爆弾投下、死者15人、負傷者25人、家屋倒壊13戸。

8月15日　日本、無条件降伏を勧告したポツダム宣言の受諾を国民に発表。

8月24日　陸軍将校ら67人、ポツダム宣言受諾の撤回を求め川口・鳩ヶ谷・新郷放送所を占拠し、6時～15時までNHKの放送が中止。

Place to pray for peace

青木町平和公園

総合運動場や野球場などを備えた大きな公園として市民に親しまれている青木町公園。戦争の悲惨さを心に刻み、平和の尊さに想いをはせる地として「青木町平和公園」の愛称が付けられました。

公園内には市民の平和への思いを後世に伝えるため、英霊記念碑、平和記念碑、平和の樹が設置されています。

英霊記念碑

昭和33年、世界の恒久平和を祈念し、川口の鋳物技術を用いて一体ぶきの鋳造碑として製作。

毎年行われる戦没者追悼式には大勢のかたがたが献花に訪れます。

◀英霊記念碑の後方には川口市出身戦没者2,000有余柱の芳名が刻まれています。

平和の樹（アオギリ）

昭和20年8月6日に、広島に投下された原子爆弾の爆心地から1.3km地点で被爆したものの、焦土の中で芽を吹き返した被爆アオギリ。

核兵器廃絶と世界の恒久平和実現を訴える象徴として、平成27年に広島からその苗木が贈られ、現在も大きく成長し続けています。

平和記念碑

平成22年に川口市平和都市宣言25周年を記念して設置されました。平和都市宣言の全文と、市民の公募作品から選ばれた「平和へのメッセージ」が記されており、核兵器の廃絶と世界の恒久平和への願いが託されています。

市では毎年、平和都市宣言関連事業として、小学生を対象とした青木町平和公園などの見学会を実施しています（今年度は中止）。

受け継ぐ

～戦没者遺族インタビュー～

戦争を乗り越え、平和な今こそ私たちが為すべきことは。戦没者遺族であり、川口市遺族会の会長を務める片野誠治さんとご家族に想いを語ってもらった。

残された家族は

昭和19年春、父に召集令状が届いた。兄の啓三郎さんが7歳、誠治さんは3歳の頃だった。「親戚たちと近所の神社で武運長久を祈願し、元気に送り出しました。でも、本当は行ってしまうのが寂しかった」と啓三郎さんは語る。父の営んでいた米屋の仕事は母が背負うことになった。

戦時中のことで思い出すのは空襲のこと。「日本デイゼル工業への空襲は飛行機がとても低く飛んできて、空襲警報が鳴るより前に爆弾を落としていったんです。私はまだ小さかったけど、大人たちもみんな大慌てで、怖い記憶として頭に残っています」。

父は終戦を迎えることなく、昭和20年7月に横須賀基地で戦病死。帰ってくることはなかった。兄弟で母を手伝いながら生活する日々。二人は仕事の合間、市内の鋳物工場に物々交換で手に入れた物資などを運ぶこともあったという。「配給は少なく、当時は本当に食べるものが無かった。お金があってもダメ。野菜などもみんなで融通しあっていましたね」と教えてくれた。

片野啓三郎さんと娘の桂子さん

体が動く限り続けたい

毎年行われる戦没者追悼式への参加や、国が行う遺族への弔慰金申請への協力など、川口市遺族会の活動を50年以上続けてきた誠治さん。当初、旧鳩ヶ谷市を含め2千500人を超えていた会員は300人程になり、その活動も転換点を迎えている。「戦争を知る遺族は早晩いなくなります。これから先、我々のような遺族を二度と出してはいけないんです」。その思いを風化させないよう、会に青年部を創設するなど、活動を続けている。

継承するということ

戦争の悲惨さを、「戦争を知らない世代」に如何に伝えていくべきか。「辛い経験も多いし、当時のことは子にもほとんど伝えていない。無理やり若い人に教えるというのもね」と啓三郎さんは表情を曇らせた。遺族会の青年部に所属する娘の桂子さんも「父の心情を考えるだけで辛くなってしまいますし、父に嫌なことを思い出させたくなかったんです」と話してくれた。確かに遺族など当事者が語り継ぐことは有用だが痛みを伴う。今後は文書や写真などが記憶を伝える材料になるだろう。デジタル技術の目覚ましい進歩が、より客観的な事実の保存を可能にしている現在。当時を知る人がいる今だからこそ、その事実を補完した「真実」を継承し、全ての人が戦争の悲惨さを知り、当たり前のように平和を希求するよう、私たちも取り組み続けなければならない。

川口市遺族会
片野　誠治 会長

今年度の戦没者追悼式は、新型コロナウイルス感染症対策のため、規模を縮小して実施します。
※開催日…十月十七日㈯

題字：川口市立高等学校書道部　田中 達也 さん